

『ベスティアリウム』と記憶術

—ピアポント・モーガン・ライブラリーM832 番写本をめぐる一考察

長友瑞絵

『ベスティアリウム *Bestiarium*』とは、12世紀から13世紀を中心に、西欧中世に広く流布した動物寓話集の総称である。テキストは実在の動物だけでなく、幻想の動物の性質とその寓意が語られる短い話の集成となっている。テキスト自体はオリジナルではなく、すでに西欧に流布していたキリスト教的博物譚『フィシオログス *Physiologus*』（「自然認識者」の意）を中核とし、百科全書などその他の様々な書物からの引用を加えて成立したとされ、実際には様々なヴァージョンの存在が確認される。ベスティアリウム写本は挿絵入りのものも含め多数伝存するが、文献学的研究が先行し、挿絵の展開と伝承のプロセスについては、未だに十分な考察が行われていない。とりわけ12世紀以降、テキスト・挿絵サイクル共に特徴を備えた複数の写本群が派生しているものの、こうした写本群個々の美術史的な位置づけと機能については検討されていない状況にある。そこで本発表では、この時期派生したクリュソストモス版テキスト（通称 DC ヴァージョン）の写本群のうち最古級の写本、ピアポント・モーガン・ライブラリー所蔵の M832 番写本を中心に取り上げる。12世紀半ば頃、ゲットヴァイクのベネディクト会修道院で制作された同写本の挿絵形式や写本の構成は先行写本とは著しく異なっており、単に教訓的読み物であることを目的としたとは考えがたいことから、『ベスティアリウム』と記憶術という新たな観点も含め考察を加えたい。

『ベスティアリウム』と記憶術の関係については、中世文学・言語学研究側からローランド (Rowland 1989) およびカラザース (Carruthers 1990) によって、わずかながら言及がなされている。特にカラザースは動物寓話集が中世の教育にもたらした最大の功績について、記憶のための心象すなわち「絵」を体系的に作りあげることにあつたと明言したが、美術史研究側ではこうした主張は看過されたまま現在に至っている。しかしながら発表者は、カラザースが主張する『ベスティアリウム』の記憶術への利用は、同書の写本群の諸相を解明する一つの手掛かりとなりうるものであり、挿絵サイクルの系譜という美術史的問題を解明する上でも重要な要素と考える。M832 番写本の分析を通じて、12世紀における修道院の知的文化の変化を背景に、記憶術が『ベスティアリウム』と繋がり持ち、独自の挿絵形式を持つ写本群の展開への一つの推進力となった可能性を指摘したい。